

あを 11

2024

花の
ひらくとく
の
冬
の
射
手

青
蚓
龜
蛇

佐藤竹僊

輕
ト
で
刺
身
を
造
る

秋
火
燈



十一月集

坐・誹

佐藤 竹僊

夏草に伍してすすきは油穂を

樹懶の爪のごとくを藪枯

露草の蕊の尖にも雨の粒

銀もくせい金もくせいとちる籬

秋の雨まるまる猿はほぼ人間

原發ですることといへば秋刀魚焼く

二十日月この坂下りると江戸の町

二十日月地にはとどかぬ外階段

手刀を使はずじまひ敬老日

水引草日ぐれしぐれと色深め

蜘蛛の巢のまだやはらかし秋の風

秋の月いうれい蜘蛛に子のありて

秋風をいうれい蜘蛛のいとひをり

よくみればいうれい蜘蛛に巢絲かな

益體もなき庭草に露の玉



アラン・ドロン

七郎衛門吉保

否定形にしたき季語ある九月かな

大壺に二本の芒蕎麦啜る

「太陽が・・・」アラン・ドロンの予言かも

地球からデコピン受くる台風禍

山古志の棚田にゆらり鳥威し

骨太に栄養満点秋の山

塩辛に赤にヤンマの池塘径

群青の空深くして鰯雲

秋澄むやコキアは風を受け流し

足湯にて実り見下ろす秋麗



白秋

篠田純子

秋徼雨電子書籍のまはし読み

電子書籍指に拡大秋徼雨

秋風やまだ収まらぬ脳多動

白秋や頭に三ところの手術痕

DNAに生老病死秋桜

見つからぬ銀木犀の香はすれど



坊や

篠田 大佳

中秋やメディアに強き研修医
秋蠅や市に並べたる中華鍋
今日の残暑秋の季語にはならぬかは
少年の自棄な声援秋場所に
秋涼しおれを坊やと呼ばないで
「母より」と迷惑メール秋涼し
処置なしやまだ暑き秋をひとり帰る
街ひとつ均す普請や秋ゆふべ
壁を向きしづかな秋の扇風機
おれつてばしあはせだなあ自学秋



梨

須賀 敏子

幸せは梨で一杯野菜室

朝顔の一花残して素焼き鉢

骨密度満たして秋の旅に発つ

素麺も残り少なく八月尽

隣より声のかかりて初秋刀魚

電気代記録更新この夏は

能登の地に天災続く秋哀し



薄紅葉

都築繁子

いつまでも秋暑浅草二天門
新札のお釣り弾める秋祭り
白鷺の休めるブイや水澄めり
ブランコの幼な見守るパパの秋
束の間の美しき夕空萩の花
釣り人やかつら並木の薄紅葉
高原の写メール楽し鯛雲



梨

長崎桂子

街路樹の手入れ終へたり美しき
此の屋敷老松の手入れ終へ見事
菊かをる心地よき風清やかな
秋薊点点と咲く大野原
ほうき草すこし気持を前向きに
梨むいて友とひとときむだ話
コスモスやまた空家ふえ寒寒し
今日の月団子供へ平和祈る
花水木紅葉色に誇らしげ



月見る月

森なほ子

烏瓜ほどに膨れて月白し
西荻の月も丸いか友も見る
いないいないばあと雲より望の月
冷房に生かされている老いの日々
茄子挽いで刺に嬉しき悲鳴かな
ちぐはぐに住民の家避暑の家
色鳥や行司装束嵩張れる



ちちろ虫

赤座典子

秋澄むや妙義荒船峰ひかる
ひらりひらり色まき散らす鳥威
琺瑯を纏ひて着地鬼やんま
土壁に紅を点せる萩の花
賑はしやどんと挿されし吾亦紅
笑みし事一つありし夜ちちろ虫
大忙しの配膳ロボット敬老日



秋暑し

秋川 泉

そんなこと言へなかったよ秋暑し

それで今栗むく手止め尋ねけり

持久力台風の目の育ちゆく

水嵩の増したる川に秋茜

闇迫る芒の波に人の声



九月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

光の中の光は見えず八月来る

佐藤竹僊

八月と光の取り合わせに、稲光、あるいは原子爆弾の閃光を想像しました。閃光は荒々しく地面を襲い、地表を灯す弱い光を上書きします。「光」のリフレインは、生活の光が閃光にかき消される瞬間を写し取っていると読みました。(大佳)

さきがけの風に夕立のきほひかな

佐藤竹僊

同じ十七文字なのに、いやに字数の多い気がする句もあれば、その反対の句もあります。この句は後者だと思います。漢字の少なさと内容の単純さによるのでしょう。一茶の句など好例ですね。この句は、日盛りにサーッと冷たい風が吹き、この一陣の風に夕立の「気負い」が感じられるという。「自然」を巧みに擬人化される、先生らしい句だと思います。(なほ子)

香水は「御遠慮下さい」待合室

赤座典子

世の中には、なおに対するマナーが乱立しています。ビジネスマナーの文脈では、体臭や汗のにおいを忌避して、良い香りを振りまくことを勧めます。一方で、医療の現場では「香害」「化学物質過敏症」というカテゴリーで、柔軟剤や香水の使い過ぎを咎める文脈があります。掲句は

後者の状況とされますが、最近の世論は、弱者に対する視点が弱まっているように思い、掲句に興味をひかれます。(大佳)

湯上がりて温泉卓球玉の汗

赤座典子

一九九八年に松坂慶子・大杉漣などで『温泉卓球』といふ映画がつくられた。それほど温泉と卓球は健康的な文化である。いつだれが温泉と卓球を結びつけたのだらう。私の知った温泉卓球はおおむね宿の地下にあつた。家族と卓球で遊んだ記憶もある。が、どここの温泉地だったか全く記憶から抜けてゐる。掲句は湯上りでまだ火照つてゐる体なのに卓球とは“玉の汗”にならうといふもの。ここに可笑しみを覚えた。季語の「汗」とは少々ずれるかも知れないが……。卓球王国の中国ではこのやうな文化があるのだらうか、興味が湧いた。(喜孝)

茄子を煮る明日は見えぬが今日は今日

秋川 泉

「明日は見えぬ」本当にその通りだが、とりあえず今日は無事に終わつたと、茄子を煮ている。ケセラセラとつい言いたくなるが、死語でしょうね……。上五がとても良いと思います。自己主張せず、どんな調理法にも合つて食べる人をほつとさせる、ありふれたこの夏の野菜。大好物です！
(なほ子)

トゲトゲとつかむ手の中油虫

秋川 泉

油虫、ゴキブリを素手で掴まへる人はわが家族にも居た。妻はゴキブリが出現すると、周りに命令を下す。捕獲、打ち損じると大ごとである。しかし私の母がゐると問題は解決する。妻が騒ぐ前に手で掴まへて処理してしまふ。まさに掲句のやうにである。“トゲトゲ”は掴んだ人でなくては云へぬオノマトペである。云はれてみるとこのやうな経験のない人にも伝はつてきた。この句のリアルさをいただいた。リアルであればあるほど油虫嫌ひには嫌はれる作品になる。(喜孝)

梅雨の雷プラチナ色を撒き散らす

七郎衛門吉保

夏の雷雨イコール夕立、青空がたちまち黒雲に覆われて、止んだ後もすぐに晴れ上がる。梅雨の雷だと、はじめから暗くじめじめしている。稲光も白より鮮烈なプラチナ色。どこに走るかわからない稲妻を「雷」が撒き散らす、が言い尽くしています。(なほ子)

§

梅雨の鬱陶しさを撥ね反すやうな作品。雷光をプラチナ色と詠んだ人は居たのだらうか。文頭にも書いたことだが“撒き散らす”ことで梅雨の鬱陶しさを見事に散らすことができた。見立ての効いた作品。(喜孝)

渋谷交差点香水と酸欠と 篠田純子

真夏の夜のかの渋谷スクランブル交差点。青信号になって両側からどつと群衆が進み出す。真ん中あたりで膨れて辺りの空気は薄くなる（少々オーバー？）。汗、体臭、朝付けた香水と、さつき付けたばかりの香水が……。そういう体験をする機会も全く無くなり、昼間の体験を元に想像するばかりですが……。 （なほ子）

口開けて竜舌蘭の花仰ぐ 篠田純子

竜舌蘭の花を称賛するあまり言葉を失ただ「口開けて」と詠まれた。写真で見ても花茎の天を突くかとおもふ高さに驚く。まして実物を前にしたらさぞかしとおもふ。「口開けて」「仰ぐ」と体の動きを以て竜舌蘭の花への驚きを的確に伝へてゐる。（喜孝）

完成は腐敗の母や夏の雨 篠田大佳

努力は成功の母、又は失敗は成功の母、という格言のパロディですね。かなりの確率でこれは正しい。高温高湿、まさに夏の雨は腐敗の母……。せっかくの料理がパアになってしまった悔しさ、これは実体験でしょうか？ （なほ子）

七夕やしあはせだから願ひ書く 篠田大佳

七夕の短冊に書く願ひごとは、およそ今より幸せにと、少し下がって平穏が続きますやうにと書く。掲句は「しあはせだから願ひ書く」と云ふ。しあはせではなかったら願ひごとは書かないといふことではないだらう。短冊に向かつて真剣な顔でおねがひを書いてゐる子供たちの数が見える。やはらかなころもちになる作品である。（喜孝）

夕立いまゲリラ豪雨と名を変へて 須賀敏子

現代人が日常で使う語彙は、語気が強く、攻撃的に聞こえる語彙が増えていると思います。掲句においても、ゲリラ戦という遊撃軍が起こす突発的な小規模戦闘の意味を借りて、突発的に局所に一時的に降る激しい雨をゲリラ豪雨と呼んでいます。夕立で意味は十分賄えるけれど、雨の性格が昔と変わって攻撃的になったと示したかった造語なのでしょうか。ただ、現代語彙は詩語としては取り扱いが難しく、今なお違和感をもって詠まれています。（大佳）

蒸暑し着替へのシャツはインド綿 須賀敏子

インド綿の長所は、柔らかくさらさらとした感触で肌触りが良いこととく。蒸し暑い日本の気候にインド綿は評判が良いとのこと。聞くだけでも汗の身にはおつたインド綿のシャツ。暑気も少々安らぐといふもの。掲句はインド綿の感触のごとくさらりと作られてゐる。（喜孝）

仲見世や若き一団夏衣 都築繁子

浅草寺の仲見世を訪れた句と読みます。若い人の集団が夏の装いをしているという句意ですが、服装の文脈がわからなくて不思議に思っているように読みました。光景の不思議を補うならば、例えば、観光に來た人たちが仲見世近くの貸衣装のサービスを受けて、非日常感のある懐かしの和の装いで観光地を巡っているなどと想像しますが、実際のところはどうかでしょう。 (大佳)

夏の雲クレーン居座る夜のビル 都築繁子

明りを落とした夜のビルを想像する。建設中のビルかも知れない。屋上にクレーンが立つてゐる。ビルには異物のやうに。このクレーンを「居座る」と見た。詠んだ。夜とは云へ夏の雲がありありと浮んでゐる。新鮮な都会の風景句。(喜孝)

蝉の鳴く八月早朝明けにけり 長崎桂子

蝉も色々な種類の蝉がいますが、気温が三五度を超えると、どの蝉も鳴かなくなるそうです。蝉の声が聞こえないと危険な暑さになるという捉え方もあるそうで、早朝の比較的気温の低い時間帯に蝉の声が聞こえると、暑さが和らいでいるのだと読めます。そうすると蝉の声の情緒も変わってきて、静かな夏は賑やかな夏より過酷な夏なのだと思います。(大佳)

打敷の褪せない朱色盆用意 長崎桂子

盆用意のひとつである打敷。桂子さんの用意した打敷は朱色を基調にしたもののやうだ。毎年この時期にお目にかかるが、いつもの鮮やかな朱色を保つてゐる。心をこめてご先祖を祀る桂子さんの思ひが伝はる。(喜孝)

隣り合ふ人にも馴れて夏の旅 森なほ子

飛行機や電車といった公共交通機関に長時間乗る旅だったのでしよう。隣席の人と座席で初めて隣り合つたとき、体の幅や声、仕草、においなど、どこか気になるところがあつたのかもしれない。窓の外の変わりゆく風景に、少しずつ緊張も解けて、旅に夏の色が加わつたように読みました。(大佳)

子ら遊ぶ背景いつも百日草 森なほ子

草木の花も人が生きるうしろで確りと咲いてゐる。人それぞれに花へのおもひをもつ。人生の中で鮮明に生きつづける。なほ子さんにとっての百日草の花は、そのやうな特別な花である。(喜孝)

秋收集

影持たぬ水引草の心だて
太陽は沸騰西瓜はいびつ

佐藤 竹僊
秋川 泉

抱へたる西瓜の臍の大きけり
葦簾張り男がひとり眠り入る
語り部も聞き手も減りて敗戦忌

七郎衛門吉保

幾万の足軽の如芒原
「蓬平」寝湯の耳元虫すだく
不忍の風鈴二千いつせのせ

篠田純子

お通しに冬瓜煮もの長居せる
ビビアンリー程のウエスト夏痩せて
ゆく夏やひねもす壁の白き部屋
雑貨屋の去る空室へ西日かな

篠田大佳



朝一番塩辛蜻蛉と擦れ違ふ
野仏にお干菓子供へ盆支度
蓮の葉のうねりの向こう見え隠れ
グランドの眩しき投光夜の秋
今年また東の窓に家守くる
高原を埋め尽くしをりカモミール
行水も洗濯もして木の盥
一枚の木の葉と埃日向水
置いてきし打ち水日向水の日々
大き栗乗る釜めしと決めにける
山古志の空は広々雲の秋

須賀敏子

都築繁子

長崎桂子

森なほ子

赤座典子



季語あれこれ 「もみぢ」

佐藤喜孝

紅葉の俳句には不思議とこれぞとおもふ句が少ないといふ印象がある。『俳句朝日』で二〇〇四年十一月号で「紅葉五〇〇句」といふ特集を組んだ。副題として「芭蕉から真砂女 現代の主宰ら五〇〇人」として

人毎の口にあるなり下紅葉

芭蕉

(人毎の口に有也した栴)

生きる張り路傍の草も紅葉して

鈴木真砂女

猪股千代子選

なんともさびしい芭蕉三十二歳の作品である。

私も依頼されて自作を眺めたが寄稿する自信のない句ばかりで困った。「湖心へとさかしまに墜つ櫛もみぢ竹僊」をなくなく出した。今回『あを』の句を再読

してゐて堀内一郎作品に「池ありて人も紅葉もさかさまに」を見つけ心丈夫になつた。

湯けむりやゆるゆる山を櫛もみぢ

石森和子

もみぢして雪囲待つ亭の庭

渡邊京子

いにしへの高尾もみぢや言問はん

河合笑子

すつぽりとさくらもみぢの土手を行く

森理和

足濡るることの侘びしさ谿もみぢ

竹内弘子

霧深し米粒ほどの草もみぢ

森理和

眼の下に連なるもみぢ長廊下

田中藤穂

川隅を銀杏もみぢのはやながれ

佐藤恭子

静静と朝日が移るもみぢ谿

佐藤恭子

湯あがりの人と會ひけり朝もみぢ

佐藤竹僊

湖心へとさかしまに墜つ櫛もみぢ

佐藤竹僊

彦根城名代の桜うすもみぢ

芝尚子

もみぢ谷吊橋人員制限あり

木村茂登子

もみぢ池まつすぐに行く白き鯉

篠田純子

終り佳しさくらもみぢのきれいさび

木村茂登子

薦もみぢ志んぐうばしの大燈籠

東亜未

雲に入り霧を出て濃し草もみぢ

堀内一郎

逆上がりの練習板にもみぢ降る

竹内弘子

測量の杭打たれゐる草もみぢ

鈴木多枝子

散りもみぢたひらな道につまづけり

佐藤恭子

いてふもみぢ気取つて食べるスパゲティ

篠田純子

ささながれもみぢのうへに雪残る

佐藤恭子

もみぢ且つ散り円墳の句ひけり

篠田純子

宝永山黄金色の夢もみぢ

須賀敏子

さくらもみぢセーターの胸に留め

竹内弘子

吉宗のあびしいちやうもみぢかな

佐藤恭子

刀の鏝壁に埋めあるあをもみぢ

篠田純子

猫はしる背のもみぢ葉落ちもせで

佐藤恭子

捨つるに惜し緋色濃淡櫛もみぢ

長崎桂子

素行の墓に乃木大将の梅もみぢ

篠田純子

水きらら堀端桜もみぢして

田中藤穂

曇天のいてふもみぢのなほもみぢ

篠田大佳

A1の描く水星のもみぢかな

篠田大佳

万葉人のもみぢは黄葉ときく。いつごろから紅葉が主

役になったか興味のあるところ。

百態の黄葉の着地夕日中

松本米子

メタセコイヤ天に对ひて黄葉す

早崎泰江

黄葉散る両手に抱きいのち嗅ぐ

長崎桂子

雨上がり銀杏黄葉の煌めきて

芝宮須磨子

銀杏黄葉漣にまた大波に

東亜未

いてふ黄葉世間ばなしの羅漢さん

篠田純子

銀杏黄葉ベンチに憩ふ老紳士

早崎泰江

すつぽりと銀杏黄葉に小さき寺

森理和

冬黄葉葉缶ちりちりカフェ静か

森理和

いちやう黄葉白塚の池覆ひけり

芝宮須磨子

けやき黄葉空の青さを忘れぬし

大日向幸江

いちやう黄葉すつくと東京タワーかな

篠田純子

身中をあふれ出でたる黄葉の香

佐藤恭子

セントローレンス廻行する船黄葉道

七郎衛門吉保

メープル街道日本名付けし黄葉好き

七郎衛門吉保

近々と越後湯沢の黄葉山

森なほ子

この雲は雪国の雲黄葉山

森なほ子

銀杏黄葉駅舎の屋根は赤く塗る

森なほ子

黄葉にみせらるる思ひ出を暫し
银杏黄葉つとに明るし皇居前

おほかたは谿に散りゆく照紅葉

透きとおるからまつ林蔭紅葉

ゴンドラの風舞ひ落す櫨紅葉

大道芸桜紅葉に囲まれて

紅葉を映す十和田湖青深む

紅葉の斜面に雪のまだら置き

瀧春一瑞牆山が紅葉する

平ヶ岳行けども行けども紅葉なり

山霊の棲むあたりより紅葉せる

枯がれの大樹のまとふ蔦紅葉

一本の紅葉が雑木林の米え

蔦紅葉記憶ほろほろ欠落す

どの山も緞帳垂るる紅葉時

青空や櫻紅葉のつづく土手

若きダム杉に取り付く蔦紅葉

長崎桂子
都築繁子

栢森定男

松村美智子

赤座典子

芝尚子

早崎泰江

須賀敏子

堀内一郎

須賀敏子

関口ゆき

芝尚子

竹内弘子

田中藤穂

関口ゆき

長崎桂子

篠田純子

大鍋を河原に運ぶ薄紅葉

さめざめと紅葉且つ散る橋の上

探しもの佛壇にあり紅葉どき

薄紅葉昭和のポスト褪せて立つ

誰呼ばん一山紅葉神の国

單線の駅舎に迫る紅葉山

靴の汚れ一団の着く紅葉宿

紅葉川底の遅速は魚ならむ

石庭の渦に紅葉の浮かびをり

紅葉山おとぎの色の保育園

もう一度寝釈迦に逢はむ紅葉酒

行違ふ木道きしみ紅葉沼

紅葉の火打山より日本海

ハーケンを打込む音や薄紅葉

紅葉から紅葉へ雫紅葉散る

降りしきる紅葉の林通り抜け

町なかに實の残りをる柿紅葉

子離れや紅葉乱吹の中に居て

鈴木多枝子

篠田純子

堀内一郎

長崎桂子

鎌倉喜久恵

芝尚子

田中藤穂

佐藤恭子

佐藤喜孝

佐藤喜孝

堀内一郎

森山のりこ

須賀敏子

須賀敏子

森理和

鈴木多枝子

長崎桂子

須賀敏子

霊山は紅葉輝く福島路

男体山ふもとの紅葉知らぬげに

一入と八入の混じる紅葉山

鎌倉もそろそろ紅葉日を集む

曖昧な記憶をたどる紅葉狩

神棚のうすきほてりや柿紅葉

ピカソ観たしマチスも観たし柿紅葉

行きづりの子とはしやぎ合ふ紅葉山

紅葉散ると隣るるひとの寝息かな

人声の谷越えてくる紅葉狩

みな笑みて紅葉の櫨見上げゆく

また別れ目のまはりから紅葉して

遭難碑耳をすまして紅葉する

富士仰ぎ又見返しつつ山紅葉

青空に櫻の紅葉核実験

戦國の武將の自刃紅葉濃き

紅葉山川下るたび色を替へ

鹿の鼻ぬれにぞぬれし初紅葉

須賀敏子

須賀敏子

長崎桂子

鎌倉喜久恵

森山のりこ

木村茂登子

早崎泰江

篠田純子

佐藤恭子

鎌倉喜久恵

田中藤穂

堀内一郎

堀内一郎

森理和

長崎桂子

長崎桂子

森山のりこ

篠田純子

奪衣婆の石垣埋る草紅葉

櫨紅葉朝日に映ゆる夜の雨

池ありて人も紅葉もさかさまに

梵鐘の一撞しみる紅葉かな

登校児踏みしだき行く櫨紅葉

壮行や桜紅葉を電車ゆく

風の息深くして散る櫨紅葉

さくら紅葉耳のうらから眠くなる

山頂はガスかかり来る草紅葉

白雲と紅葉の里に今を置き

紅葉狩先づは写経の墨をする

縁側にちよこんと母が柿紅葉

玉原の木道行けば草紅葉

噴煙を上げて十勝岳の裾紅葉

渋滞も紅葉の中いろは坂

錦秋湖雑木紅葉の遊歩道

腰痛を暗がりになき紅葉山

紅葉もテレビの中の事として

森山のりこ

長崎桂子

堀内一郎

早崎泰江

長崎桂子

堀内一郎

長崎桂子

鈴木多枝子

堀内一郎

芝宮須磨子

藤野寿子

東亜末

須賀敏子

鎌倉喜久恵

須賀敏子

須賀敏子

堀内一郎

森山のりこ

古家の紅葉且照り且散れり
絵具箱二十四色照紅葉
箱根路や車窓の紅葉もつれ会ふ
榛名湖やあまねく映す紅葉色
あを十年櫨の紅葉に迎へられ
清澄はあをあととして櫨紅葉
通勤電車今日は賑やか紅葉狩
転ぶなど云ふから転ぶ紅葉山
紅葉はき紅葉を焚くや寺男
霧はれて紅葉おどろく人おどろく
躑くもここまで紅葉してゐたり
白壁をおほひ尽して蔦紅葉
年年歳歳古き佛に紅葉す
憂きことをしばし忘るる紅葉かな
紅葉狩都バス一日乗車券
ひそやかに草紅葉して愛しかな
閨魔より奪衣婆恐し紅葉寺
けやき紅葉東京タワーの股ぐらに

東亜未	都バスで飛ばすぜえなんと紅葉狩	篠田純子
東亜未	紅葉越えビル越え東京タワーの影	佐藤喜孝
森山のりこ	東京タワー桜紅葉をぬってみる	佐藤恭子
赤座典子	蔦紅葉血は立ったまま立ったまま	篠田純子
須賀敏子	紅葉狩の人の多しカレーの香	篠田純子
斉藤裕子	草紅葉石の貨幣に縞模様	斉藤裕子
鎌倉喜久恵	登り来し道は何処に山紅葉	大日向幸江
堀内一郎	一人行く雑木紅葉のしやりちやりしや	七郎衛門吉保
堀内一郎	柿紅葉桜紅葉とつづく坂	田中藤穂
斉藤裕子	草紅葉大判の千代紙のこと	長崎桂子
木村茂登子	輪蔵は壊れてをりぬ初紅葉	篠田純子
早崎泰江	紅葉寺外数名で拝観す	中川句寿夫
篠田純子	紅葉谷鎖に縋る奥の院	須賀敏子
長崎桂子	色褪せしものは捨てなむ櫨紅葉	田中藤穂
田中藤穂	櫻紅葉朽ちたり擡げくるもの	長崎桂子
篠田純子	渦巻きて深みにをどる紅葉かな	秋川泉
篠田純子	木漏れ日は弱くて紅葉かつ散りぬ	長崎桂子
	さくら紅葉に透け弁天堂華やがり	篠田純子

拾はれてすぐ捨てられる草紅葉
紅葉の塩害痛みや劳しい
初紅葉令和天皇即位の儀
急坂に石はころがり紅葉山
足取られ此所より愛でる山紅葉
雑木紅葉見晴台へ細き径
距離をとり言葉少なに紅葉狩
紅葉山スマホに容れて持ち帰る
立山や紅葉と硫黄地獄谷
称名滝百丈の壁薄紅葉
黒部峡断崖絶壁薄紅葉
カロートに紅葉かつ散り兄の入る
町筋の紅葉し主婦の立話
いつはりのなきが景色や紅葉山
村人は紅葉の中に暮らしをり
細波の揺れて色消ゆ薄紅葉
沼の面に浮かぶ昔日薄紅葉
ビル十階程メタセコイアの紅葉す

大日向幸江	他の土地は知らないが東京は冬に入ってからが本格的に紅葉期となるやうだ。東京の冬もみちは庭園は別として街中ではなんとなく色づきそして枯れていく。	芝尚子
長崎桂子	杉山に象嵌めける冬もみぢ	東亜未
須賀敏子	冬もみぢ青梅の雨はしとど降る	芝尚子
森なほ子	杉山の尾根ひとところ冬もみぢ	芝尚子
須賀敏子	茅葺の蕎麦屋を囲む冬もみぢ	東亜未
森なほ子	透きとほる雨の一日冬もみぢ	篠田純子
七郎衛門吉保	屹立のビル手の内に冬もみぢ	篠田純子
赤座典子	内匠頭も吉良も名君冬もみぢ	篠田純子
七郎衛門吉保	さぎ一羽行つたり来たり冬もみぢ	江倉京子
長崎桂子	冬紅葉湯治の客の静かなり	山莊慶子
亀田虎童子	冬紅葉火の見櫓はつきぬけり	長崎桂子
森なほ子	山寺の青銅の塔冬紅葉	長崎桂子
赤座典子	冬紅葉通天橋にしきつめて	森山のりこ
都築繁子	散る時が来てもあざやか冬紅葉	須賀敏子
都築繁子	ハーケンを斜めに打てり冬紅葉	

寺への道尋ねあてたる冬紅葉
冬紅葉耳を澄ませば水の音
木漏れ日や確と燃立つ冬紅葉
冬紅葉幻想かもす夜の帳
着飾りしをみなのごとし冬紅葉
祠より猫飛び降り来冬紅葉
走り去るおさげの髪に冬紅葉
辛うじて平成であり冬紅葉
あつけなく冬の紅葉の果てにけり
冬紅葉走りぬけたる三冠馬
湯の宿へひたすら歩き冬紅葉
奉公の愛馬の碑あり冬紅葉
冬紅葉平らな時間過ごしをり
冬紅葉夕陽を入れて輝けり
所在なきベンチがひとつ冬紅葉
ちりちりと枝に纏る冬紅葉

森山のりこ
堀内一郎
赤座典子
長崎桂子
長崎桂子
篠田純子
秋川泉
赤座典子
大日向幸江
秋川泉
秋川泉
須賀敏子
都築繁子
都築繁子
都築繁子
赤座典子



花のひらくごとく冬日のさしにけり 瀧春一

佐藤喜孝

十一月の「あをやぎ句会」に「サンルームになるひとときを酔茎かな」を出句した。賛同を得られなかった。十一月のいま頃四畳半は南からと西からと日を取り込めるやうになつてゐる。夏は暑すぎるが、冷え込んできたこの頃はありがたい。瀧先生の俳句のやうな部屋になる。

表紙の書は環八沿ひの砧の瀧先生のご自宅にお伺ひして揮毫していただいた。書いていただく目的を忘れてしまつたが、その日のことは驚きとともによく覚えてゐる。先生は「花」の字がだうしても書けないと云ひ出されたのである。花の字の人偏のところ、空白になつてしまはれたやうす。ボールペンで書いて差し上げても首を捻つてをられる。不思議な現象だと思ひつつ、仕上がった作品が表紙のものである。無理にお願いして書いていただき、今眺めてみると、そのやうなことより暖かさに包まれて拙句のサンルームにゐる心地になる。この日から少したち先生の作品が『暖流』から消えた。

結婚して数年後隣家の二階に住んでおられた須賀敏子さんが、新居を建て移られた。代りに私たち夫婦がその後を借りることにした。部屋へは外階段を上ることになる。結婚式の司会をしていただいた堀内一郎さんと瀧先生に来ていただき、恭子の手料理を食べていただいたことがあった。お酒の入った瀧先生を介助しながら、外階段を降りた日のことが懐かしい。

あとがき
カメムシ



あをやぎ句会の翌日はリハビリと毎月決まってる。リハビリの迎車を迎えるために外で待つ。すこし前にこぬか雨がやんだ庭のメダカに餌を撒いたり茗荷畑の枯れ様を眺めたりしつつ、ブロック塀の上をみる。少し大きなカメムシを見つけた。とりあへず瓶の中に入れリハビリに出かけた。楽しみに帰つてみるとほと

んど動かない。調べると黄斑亀虫といふ日本最大の亀虫とか。最大といふことで嬉しくなる。少し前に庭にきた亀虫がゐた。紫白星亀虫といふ極小のヤツ。写真は指頭に乗せてゐる。4mmあつただらうか？
二〇二四年はカメムシが全国的に大量発生したといふニュースがあつた。原因のひとつに暖冬により寒さで死ぬカメムシの数が減つて……。といふことで増えたらしい。越冬の可能性を知り、とりあえずコタツの中に入れ、日が差すと其処に移動。だいぶ動きが活発になつた。さてさうなれば、餌は要るのか要れば何を与へればいいのか悩み始めた。
(喜孝)

二〇二四年十一月号

発行日 十一月二十二日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)